

The IUCN Red List of Threatened Species – An Overview

生物多様性JAPAN特別講演会

『IUCNレッドリストについて学ぶ』

ジェーン・スマート Jane Smart

国際自然保護連合（IUCN）生物多様性保全グループディレクター・種のプログラム代表

- 日時:2010年2月28日(日) 13:00-16:00 (開場12:30)
- 場所:お茶の水ホテルジュラク 白鳥の間 (東京・御茶ノ水)
- 主催:生物多様性JAPAN、IUCN日本委員会
- 協力:IUCN日本プロジェクトオフィス





ジェーン・スマート Jane Smart

国際自然保護連合（IUCN）生物多様性保全グループディレクター
種のプログラム代表

生物多様性保全グループは、種のプログラム、保護地域プログラム、世界海洋プログラム、侵略的外来種プログラムで構成される。またIUCNコアプログラム（2009-2012）の促進に中心的役割を担う。種のプログラム代表として、スイス、アメリカ合衆国ワシントンDC、イギリスケンブリッジの35人のスタッフと、「IUCN絶滅危惧種レッドリスト」の編集・出版を担当。種の保存委員会フォーカルポイント。植物学を専攻し、植物生態学者としてキャリアをスタート。1989年、Plantlife Internationalを創立し、初代最高責任者となる。1993年ヨーロッパにおける植物保護組織のネットワークであるPlanta Europaを設立。IUCN事務局に加わる以前は、IUCNイギリス委員会の代表を務め、また種の保存委員会植物保護小委員会のメンバーを長期にわたり務めた。国際的な保護活動に対し2003年OBE（大英帝国勲章）を授与された

【はじめに】竹下信雄（生物多様性JAPAN）

今日は「生物多様性JAPAN」という私どものNGO主催の特別講演会にお越しいただきありがとうございます。

イギリスからジェーン・スマート博士をお招きして、IUCNのレッドリストについて学ぶということで3時間ほどお話をうかがい、また質疑応答を進めたいと思います。私は本日司会を務めます生物多様性JAPANの竹下（信雄）と申します。よろしく願いいたします。

まず、生物多様性JAPANの歴史をお話します。1992年にブラジルのリオで環境サミットが開かれました。その前から生物多様性という概念をいろいろ勉強しようということで、主に東京ですが、研究者や国会議員、NGOの人が集まって勉強会をやっておりました。それがながれながれて生物多様性JAPANという形で活動をやっております。私どもは生物多様性JAPANという言葉は長いので、身内では「生」（ナマジェイ）」とっております。発音もきれいなので、私は気に入っております。

今日はスマート博士には基本的に英語でお願いしております。逐語通訳がつきますので、多少時間はかかりますけれども含みおきいただきたいと思っております。通訳はサイマル・インターナショナルの池田かおるさんをお願いいたします。今日お配りした資料は英語のままをプリントアウトしたものがお手元にあるかと思いますが、パワーポイントのスライドが80枚ありまして全部翻訳することができませんので、とりあえずはその英語版で我慢していただきたいと思っております。もっと詳しくきれいなものを見たいという方は、生物多様性JAPANのWebサイト（<http://www.bdnj.org/activity/100228.html>）にすでに掲載しておりますのでご覧ください。

今日のお話は8つの項目にわけて進行いたします。ひとつずつのまとまりが終わりましたら、その時のお話について質問を受けるという形で進めたいと思っております。

それでは、ジェーン・スマート博士をお願いいたします。

【ジェーン】ご紹介どうもありがとうございます。

皆様こんにちわ。本日は足元の悪い中、しかも寒い日にもかかわらずいらしていただき、とてもうれしく思っております。今回は逐次通訳付きということですので、私もゆっくりめにしゃべるようにとわれていますので、早口になったら気をつけなくてはいけないと思っております。

実は今日は3冊くらいパワーポイントを用意してきましたのですが、時間の制約がございますので1冊目しかお話できないと思っております。時間が残れば、あと2つも触

れてみようかと思っています。

私の履歴についてはもうご紹介があったかと思うのですが、詳しくはご紹介しませんけれども、もともと私は植物学者及び植物生態学者でして、本日生花が飾られていてとてもうれしく思っています。野生のものではないとは思いますが……。

今回は8つの部分にわけてお話したいと思っております。ひとつひとつの部分が終わるごとに質疑応答させていただきます。ご理解できなかったところは、遠慮なく何でもけっこうですのでお聞きになってください。

レッドリストについての一般情報は皆さんももっていらっしゃると思うのですが、すべて知っておられるということではないと思っておりますので、ぜひ何なりとご質問をお願いします。

What is The IUCN Red List?

【4】



まずIUCNというのは、どういうものでしょうか。絶滅危惧種についてレッドリストをつくっているのですが、これはいってみれば危惧リストに応じて分類する枠組みということになるのです。現在もすでに両生類の1/3、哺乳類の1/4、鳥類の1/8、および一番最後のところにXと書いてありますが、実は植物種については総数がかめないということで、どのくらいかというのはわかっていないのです。海洋植物、淡水植物、まだまだわかっていないところがあるので「X」と記しておきました。これだけ危惧リストに掲載されているということです。植物についてはのちほど詳しくお知らせいたします。

IUCNの「レッドリスト」というのは、世界で最も包括的な植物及び動物について現在どのくらいの保存状況にあるのか、集積している情報であります。絶滅

危惧のリスクについて客観的な観点から評価するシステムといえます。

それぞれの種というのはその個体群動向、個体群のサイズ、及び地理的な生息の広がりにも照らし合わせて、8つあるカテゴリーの中で基準に基づいて分類されます。種の中で絶滅寸前、絶滅危機もしくは危急と類型されるものは、総称して絶滅危惧種というふうに呼んでいます。つまりレッドリストに掲載しているからといって、すべてが絶滅危惧ではないということです。

ということで全体を見ますと、IUCNのレッドリストというのは絶滅危惧種、生態学的な要件、どうやったら保全できるかといったような対策も掲載されています。侵略種などについても記述はされていますが、それだけではなく今日ご説明したいと思っているたくさんの方の情報からできているのです。

このIUCNのレッドリストというのは、最も信憑性のある、科学に依拠した信頼のおける、世界中の種の危惧の状態について計測することのできるリストであるということになっています。そしてそれを生み出すIUCNは三重螺旋の構造を持つ組織といわれています。生物学の世界で三重螺旋というのは奇異に聞こえるかもしれませんが、つまり三者がからんでいるということです。世界中にいる種の保存委員会の人たちと、IUCNの種のプログラムの人たちと、IUCNのメンバーがそれぞれ関与してできている成果物といえます。

IUCNのレッドリストというのは、IUCNの種のプログラムが管理し、かつ出版している出版物です。SSC（種の保存委員会）というところがレッドリストについての保存基準をつくっています。いろんな情報も提供し、いろんな活動もしていますが、活動の源は実際にはSSC（種の保存委員会）だけにかかわらないものと広範なものがあります。

レッドリストはIUCNが出している出版物の中の旗艦出版物です。

保全の対策について盛り込まれている情報ということでは、世界で一級のものということになっています。

世界中にある生物多様性のおかれている現状について、モニタリングするためのグローバルな指数をレッドリストが提供しているわけです。

【8】



歴史をおさらいしてみましょう。レッドリストの考えはそもそも1963年にピーター・スコット（Peter Scott）卿によって発案されたものです。この方が、おかれている危惧の程度に応じて定義を定め、地球上の野生生物について絶滅危惧に瀕しているものたちの登録簿をつくろうといい出したのです。ここに当初の出版物を記載しておきました。

ただ実際の作業は、このかなり前から始まっていました。これについては時間があればお話しします。

ピーター・スコット卿はそもそもSSC（種の保存委員会）の委員長を務めておられた方で、WWFを創設した方でもあります。

【9】



これは今まで出版されたものを示しています。この辺でご質問があれば、おしゃってください。

【質疑応答】

【Q】「保全のための活動」に関する情報とは具体的にはどんな情報が入っているのでしょうか。

【ジェーン】あとで詳しくお話ししようと思っていたので、もう少しお待ちいただければと思います。こういった保全のためのアクションがありうるのかということは、たいていのものはレッドリストの中に書いてあります。

【Q】レッドリストとレッドブックはどのような違いがあるのでしょうか。

【ジェーン】いいご質問ですね。レッドリストというのは、もともとは本の形で出版されていました。その前はリストの形で出ていました。現在はWebサイトの形で掲載されています。この辺の情報についても、後ほど詳しくお話しします。

レッドリスト=レッドブックかと思われると思うのですが、もはやそういう形にはなっていないのです。

Who is involved?

【11】



それでは作業に誰が関与しているかお話ししたいと思います。たぶん多くの方々はIUCNの組織についてはご存知だと思います。さきほど三重螺旋方式になっていると申し上げましたが、IUCNのメンバーの人たちと、政府関係者の方たちと、NGOの方たち、また何名か今日この部屋にも集まってきていただいている方たちが入っています。

【12】



6つ委員会があるのですが、そのうちのひとつがSSC（種の保存委員会）です。

他の委員会に関係なさっている方で、今日いらしている方はいますか？

IUCNの事務局の構成は、62か国にわたって1,000人以上の職員がいます。その長を務めるのが、ジュリア・マートン・レフェベル事務局長です。これは組織図全体なのですが、私がどの辺に位置しているのか確認しておきます。私の直属の上司はブルーで示されているウィリアム・ジャクソン次長です。バルセロナで選出されたサイモン・スチュワートさんが、このSSCの委員長でもあります。そしてIUCN理事会というものがありますが、ここの命令指揮権の下についている人が私のさらなる上司であるジュリア・マートン・レフェベル事務局長なのです。

SSCと種プログラムの間は連携関係にあります。

これはもう少し詳しく「種プログラム」を説明したのですが、ご説明する必要はないので割愛します。

これは種プログラムの人たちの組織図です。詳しくはご説明しませんが、これをご覧になるとすごくたくさん人がいるんだと思われるかもしれませんが、この人たちは実際はプロジェクトごとの資金を得て働いている人たちなので、思ったほどフレキシブルに動けないという悩みがあります。

【15】



スタッフの写真です。

【17】



SSCの中には100のスペシャリストグループがあり、それぞれチェアー（長）という人がついています。それに加え、レッドリストオーソリティというところからなっております。内訳は哺乳類、植物、鳥類、魚類、両生類、爬虫類、無脊椎動物、リセプラナリィというのは各分野別、LRAというのはレッドリストオーソリティということです。

SSCのスペシャリストグループのそれぞれのチェアー（長）を務めている人たちが初めて一同に会したのが2008年のUAE（アラブ首長国連邦）でのことでした。初めて会ったなんて予想外かもしれませんが、本当です。ですから話が尽きることはありませんでした。

【19】



Red List Partnership

- Current partners :



- New partners:



The IUCN Red List of Threatened Species

現在ここに書いてあるのが、レッドリストのパートナーシップ、レッドリストづくりにおいて支援していただいている提携先です。現状としては、コンサベーション インターナショナル特にセンター フォー アップライド バイオダイバーシティ サイエンス、およびアメリカのネイチャーサーブ、ロンドンにあるインスチュートオブZoologyとバードライフというところです。近々あと5つ新たに加わるはずで、テキサスA&M大学やキューガーデンの人たちBGCI、ローマ大学、およびアーカイブ関係をやっているワイルドスクリーンです。

誰がどういうふう作業に加わっているかというメンバーの話をする、皆さんたいくつされてしまうかもしれません。しかし、これはレッドリストのガバナンスにとってとても重要なことなのです。というのも、このごろは種についてどういう評価をしているんだということ、外部からチャレンジを受けることが多いので、それに対して十分答えられるように、どういう人がかかわっているかということをお知らせすることはとても重要なことなのです。

このへんで、また何かご質問があるでしょうか。

【質疑応答】

【Q】 レッドリストオーソリティ (RLA) というものの役割について教えてください。

【ジェーン】 あとでご説明しようと思っていました。

How many species have we assessed?

【21】



では、今までいくつの種を評価したかというお話をします。まだ47,677だけです。じゃあ世界全体でいくつの種があるかということですが、正確にはわかりませんが、少なくとも1,500万種はあるということです。実際に名称が付いて知られている既知の種は180万種くらいでしょうか。まだまだ先は長いのです。それでも我々のやっている作業というのは、種のおかれている保全状況を知るには、世界で一番参考になるものです。

世の中にレッドリストと称すものは、これ以外にもいろいろあります。それはIUCNが提供しているカテゴリーとか基準とかを使っていないものでして、昔の基準を使ってつくったリストもあります。レッドリスト上に現在掲載されている種の数が増えつつあります。記載されているからといってすべてが絶滅危惧ではないということは申し上げたとおりです。できるだけ分類学上の対象範囲を広げていきたいと思っています。また多くの種というのは、リアセサメント再評価ということで複数回評価するものもあります。2008年に処理した種の数には23,000で、そのうち4,000件は新規にレッドリストに加えられたものです。あとに書いてあるものはもうすでに説明したので割愛します。

【25】

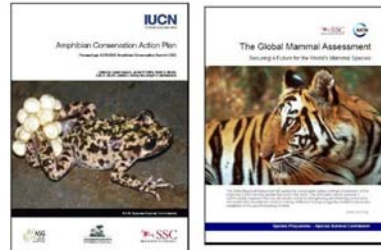


Red List Assessments

- Amphibians
- Mammals
- Birds
- Reptiles (some)

The challenge:

- Plants
- Marine
- Freshwater
- Invertebrates



The IUCN Red List of Threatened Species

今まで評価したものは両生類、哺乳類、鳥類及び爬虫類の一部です。今後やっていかななくてはいけないのは、植物、海洋種、淡水種、及び無脊椎動物です。

これまでのところで何かご質問ありますか。

【質疑応答】

【Q】微生物は入らないのでしょうか。

【ジェーン】微生物自体を評価するのは大変なのですが、それ以上でしたら何でもレッドリストの中で評価できます。いいご質問をいただいてありがとうございます。

How does The Red List Process work?

【27】



The Objective:

- Identify and document those species most in need of conservation attention if the global extinction rates are to be reduced.
- Provide a global index to monitor the status of the world's biodiversity.



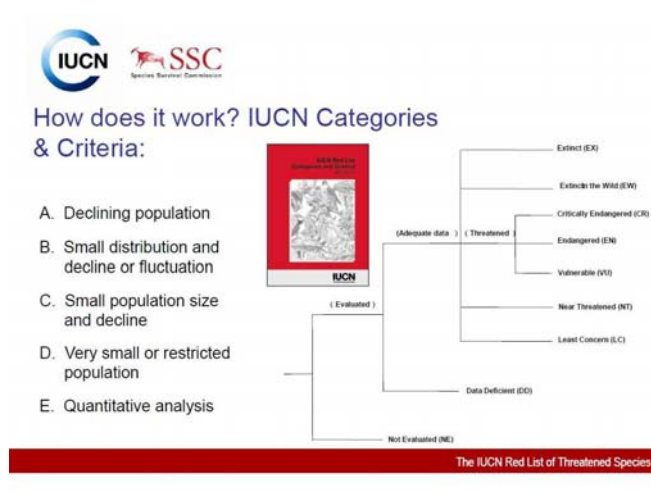
The IUCN Red List of Threatened Species

これからはプロセスのお話を詳しくしていきます。

もう一度レッドリストの目的のおさらいをしてみましよう。この地球上の絶滅

危惧のスピードを減らすために何をやったらいいかということで、そのために一番保全が望まれる種について文章化し特定をするというものです。ふたつめの目的は、世界の生物多様性についての現状についてモニタリングできるようにグローバルなインデックスを提供するということです。

【28】



実際にどうやって作業するのかということですが、5つの基準に照らし合わせて類型化（分類）します。評価基準はA、B、C、D、Eとわかれています。

Aは個体群の減少、Bは限定された地理的分布、Cは小さな個体群のサイズと減少、Dは非常に小さいが、限定された個体群、Eが定量分析です。

この基準に照らし合わせて8つある類型の中で分類をするわけですが、もちろん種を対象にして基準に照らし合わせて評価をするわけですが、全種を評価しているわけではありません。データ不足で、絶滅危惧に該当するのかどうかというのが判断できないものもあります。それらは、「評価したけれど、結局結論は得られなかった。それはデータ不足だった」というふうに扱われます。

もちろんデータが十分あればそれを評価して絶滅危惧の中に再分類されているものがあるので、どこに入るか分類するわけです。軽度懸念とか準絶滅危惧とか危急絶滅危機、絶滅寸前とあり、一番悪くなれば絶滅となります。

これは全部Webサイトに掲載されており、最新の基準なども入っています。

開発されたカテゴリー、基準というものはグローバルなレベルで使われています。

もちろん地域のレベルとか国のレベルで評価することは可能ですが、その場合には使われるガイドラインが違うということになります。

またひとつのエリアに限って種に対してグローバルな形から評価することもできます。

現場で評価した後、その結果がレッドリストに載り、成果物がWebサイトに掲載されています。

【31】



Red List Assessments – from the field to publication:



- Data collection in the field
- Expert Workshops



The IUCN Red List of Threatened Species

この写真にあるようにある種に関するエキスパートを集めて、ワークショップという形で一同に介して作業をしてもらいます。

これは両生類について作業をしているところですが、同じ両生類でも集まってもらうエキスパートの専門範囲というのは少しずつがあるので、いろいろな側面から見られるようになっています。

各人フィールドワークをすませた後、このように一同に介してどうやって評価したものか相談するのです。その先は後でご説明します。関係者が一同に介すということが重要なのです。

評価するのに使うツールとかIT関係の開発には特にこの5年間力を入れて投資してきましたので、めざましい発展があります。SISと呼ばれていますが、ITインフラに投資をした結果です。こういったツールを使ってトレーニングするといったことがとても重要になってきています。

【32】



Tools and training

- Training
- Tools, IT infrastructure and technical advice (SIS)



The IUCN Red List of Threatened Species

これがスピーシーズインフォメーションサービスSISの内容です。間違いを侵すことがないようにと設計されています。

【34】



Quality control: The IUCN Red List Unit

- Review assessments (consistency checks) prior to publication
- Management of the IUCN Red List (database, web site)
- Petitions and enquiries

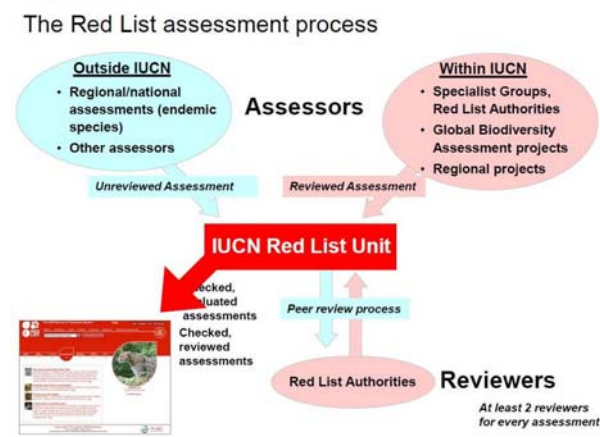


The IUCN Red List of Threatened Species

次に一貫性をチェックするというので、クオリティーコントロール品質管理するために評価された結果ができます。ケンブリッジにいる私の同僚がレッドリスト班の中でチェックをするわけです。つまりちゃんと必要な情報が記載されているかどうか、ワークショップでの作業は一貫性を保っていたのかどうかなどいろいろな点にチェックを入れて、基準が一律に守られているか等を見ます。詳しいことは後でご説明します。

IUCNのレッドリスト班にいる人たちは異議や相談も受け付けています。というのも、レッドリストに記載されているものをウェブリストでご覧になって、これはおかしいんじゃないかと異論をはさむ方もいらっしゃるので、そのために異議申し立てができる相談の制度があります。

【35】



次に、レッドリストオーソリティの話をしていきます。評価を行う人は、評価者と呼んでいます。一部はIUCNの事務局でやるものもありますし、グローバルな形、それからレッドリストオーソリティでやる場合もあるし、地域のレベルでやる場合もあるということで、評価はいろいろなレベルで行うことができます。

レッドリストの評価結果は、レッドリスト班に対して誰でも提出することができます。IUCNのほうで全国レベルでも、地域のレベルでもそれぞれ作業が行われているので、そこからあがってきた評価も提出できます。もしくはIUCN自体が世界各地に地域事務所を置いていますので、そこ単位で評価が行われる場合もあり、その評価結果もレッドリスト班にあがってきます。

まずこの評価した結果についてレビューがされて、その結果がIUCNのレッドリスト班にあがってきます。そしてそれをチェックするのが、レッドリストオーソリティということです。レッドリストオーソリティというのはいわばピアレビューをやるところ、つまりあるジャーナルに論文が掲載される前の段階において行われるピアレビューをする機関と思っていただければ結構です。

レビューされていない評価結果もあります。これもIUCNのレッドリストユニットにあがっています。複雑になってしまうのですが、レッドリストオーソリティのほうにまわる、もしくはスペシャリストグループのほうにまわる、もしくは独立して存在しているレッドリストオーソリティのほうにあがるといういろいろな場合があります。

右側のほうはレッドリストオーソリティが見ることになっているのですが、レビューされていないものについては必ずIUCNレッドリストユニットかレッドリストオーソリティのほうに依頼をしてチェックを入れてもらうということになります。

非常に複雑な関係になっていておもしろくないと思われるかもしれませんが、このごろレッドリストに掲載されているものについて各所からいろいろな異論が出ているのです。科学的なペーパーもたくさん出ていまして、レッドリストに掲載されているものはちょっとおかしいんじゃないかと意義を申し立てるケースが非常に増えているのです。それはかまわないのです。そもそもレッドリストというのはオープンで、誰でも何でも意見を言えるようになっているのですから。

ホッキョクグマの例をとりますと、IUCNのスペシャリストグループとレッドリストオーソリティが1週間でこれはvulnerableと類型されるべき絶滅危惧であるというふうに判断を下しました。なぜかアメリカのブッシュ政権のときでして、気候変動が起こっているからということもあったのですが。結局異論をはさむ人もいるということで、慎重にやらなければいけないということです。vulnerableというのは、危急という類型です。

【36】



Red List Documentation:

- All species in the Red List have supporting documentation.
- Justifies the selected category and criteria.
- Allows analysis of Red List data (information coded using standard Classification Schemes).
 - Taxonomy including authority details.
 - Common names
 - Red List Category and Criteria
 - Countries of occurrence
 - Map of distribution
 - Rationale for the assessment (supporting the criteria used)
 - Names of assessors
 - Habitat preferences (text & codes)
 - Major Threats (text and codes)
 - Conservation Measures in place & needed (text and codes)
 - Citations list
 - Reasons for any category changes

The IUCN Red List of Threatened Species

次にレッドリストの文章化についてご説明します。

すべてレッドリストに掲載されている種というのは、証拠文書をつけなくてはならないとなっています。それを持ってカテゴリーの分類や、基準、どうしてこういうふうになったのかということ正当化するという事です。またレッドリストデータというのは分析可能になっています。というのは、すべての情報は標準型の分類コードを使ってコード化されているからです。詳細は割愛しますが、基準としてどういうものに配慮しなければいけないかということここをリストアップしておきました。

【37】



A new global hub for Red List Training

- Special training is needed to conduct a Red List Assessment
- There is a big need for training
- And a need to train trainers
- All over the world...



The IUCN Red List of Threatened Species

レッドリストの中で研修を行うというのは、とても重要なポイントです。

この写真はスイスの本部で撮ったものです。

実は今IUCNは新しい本部のビルをジュネーブで建設中で、最初の鉄入れ式をやったところです。昨年写真ですが、事務局長が写っています。新しく建てられる本部ビルは、非常に環境に配慮したものになっています。リードの認証で

プラチナのランクをもらうことになっています。

写真右上が新しいビルの中に設けられている訓練研修センターです。私も来週引っ越すことになっています。

トレーニングだけでも立派なテーマになります。これだけでセミナーを開かなければいけないくらい大きなものです。なにしろ研修の人数が多いということと、トレーナーのトレーニングをやらなければいけないということも緊急課題です。

これまでのところでご質問あるでしょうか。

【質疑応答】

【Q】哺乳類などはすべての種を対象にしているからいいですが、まだ対象としていない分野で、評価対象とするものが絶滅危惧種にバイアスがかかっているようなことはないのでしょうか。

【ジェーン】もっともなご質問だと思います。たとえばレッドリストに掲載されている植物の種をご覧いただくと、どうしても絶滅危惧種に類型されているものに評価が偏りがちという現実があります。ですから各分類に基づいてサンプリングして、一律に評価できるようにもっていく必要があると思います。どうやってサンプリングをするかといったことで参考になるサンプルインディケーターのリストも、レッドリストの中にあります。できるだけバイアスがかからないで、全種の種類を対象にしておしなべて評価ができるように図ってはいるのです。ただこのお話は、もうひとつセミナーを開かなければいけなくなりますが。

【Q】1994年にレッドリストカテゴリーができてから、できる限りEの基準で量的なデータがあれば選ぶということになっていて、日本の研究者はなるべくこれに基づくべきだと言っています。ただアメリカマナティはたくさんのデータがあっても、アフリカマナティのデータはないということもあります。マグロなどはそういった基準で選ぶと科学的じゃないじゃないかと批判があります。こういったことについてどういうふうにお考えでしょうか。

【ジェーン】いい点をついていただいてありがとうございます。私もおっしゃったことに100%同感です。つまりデータがあれば、いろいろな技術があるのでそれを併用することによって分析できますが、世界中データの揃っていないものはたくさんあります。しかし、植物学者とか科学者はその目で見て、現場に行って何があるかということがわかっているわけですし、どこに生息しているかということも目で見てわかっているのです。こういった自分の目や足で集めた特別な知識も重要であるので、いろんなアプローチを駆使して調べるべきではないかと私は思っています。

またマグロの話をされましたが、これは今非常に話題を呼んでいるテーマなので触れたいと思います。だから、慎重にやらなくては行けないと。特にマグロは政治的な関心のテーマになってしまいましたので。マグロのリスティングについても、IUCNの専門家が内容のアップデートをしようとしているのですが、世の中が政治化してきたということで今は控えています。しかし我々と

しては、マグロについてはワシントン条約のアペンディクス1に載せるという提案がありますが、これに対してIUCNとしては科学的な助言を出しています。こういった分析を提供するというのも我々のやっている仕事の一部です。これについても現状を後でお話することはできます。

【Q】レッドリストに関連して、いろいろなところに科学的な情報データベースが存在していますが、こういった科学的なデータベースはどのようにマッチングするのか、参考にするのでしょうか。

【ジェーン】評価するときには手に入るものは何でも、世の中から情報をもってきて使うということをしています。ワークショップに集まってくる専門家の人たちも、随時オンラインであるとあらゆる情報源を検索しているわけなので、全部見るようにしています。しかし世の中にあるデータベースがあまりにも多くなりすぎたというのが大きな悩みです。

【Q】リージョナルプロジェクトについてもう少し聞かせてください。

【ジェーン】地域ベースで絶滅危惧になっているものについては、また別のカテゴリーが追加的に用意されています。これは第2のパワーポイントのセットに関連していることです。そこまでいく時間があれば、ご説明できると思います。

【Q】私は鳥に関心をもっています。IUCNの最近のレッドリストを見ますと、昔からの伝統的な分類学では同じ種であるが、亜種の違いというふうに私たちは勉強してきたのですが、IUCNではそれぞれ別種であるとわけられています。これには非常に違和感を覚えるのですが。無理にこれは絶滅危惧だからということで、新しい種として認定してしまうというのは乱暴に思えるのです。

【ジェーン】鳥類のレッドリスト化をやっているのは、パートナーのひとつであるバードライフ・インターナショナルです。確かに彼らとしては、種と亜種とそれぞれ別に評価していることで混乱が生じているということは知っています。別々にやってしまうので混乱が生じるんだろうなというところまでは知っています。満足いくお答えにならなかったかもしれませんが、バードライフとしてはできるだけ分類の内容については安定化しようと思っているわけで、これはレッドリストのものにとっては助かっていることです。分類学自体が安定していないと、レッドリスト化も煩雑になってしまいます。

The IUCN Red List—A website

www.iucnredlist.org

【39】



An example: Tasmanian Devil (*Sarcophilus harrisii*)



The IUCN Red List of Threatened Species

Webサイトにレッドリストは載っていますということで、これがアドレスです。全部字を読み上げることはしませんが、ひとつ例をあげることで、こうやってWebサイトが利用できますということをお話します。

【40】

The IUCN Red List of Threatened Species™ 2008

Home | Feedback | FAQ | Terms of use

About | Initiatives | News | Photos | Partners | Sponsors | Technical Documents

Enter Red List search terms: [] OTHER SEARCH OPTIONS

HELP SPECIES PAGE

Sarcophilus harrisii

Summary | Classification Schemes | Images & External Links | Bibliography | Full Account

Taxonomy (log)

Kingdom:	Phylum:	Class:	Order:	Family:
ANIMALIA	CHORDATA	MAMMALIA	DASYURIMORPHA	DASYURIDAE

Scientific Name: *Sarcophilus harrisii*
Species Authority: (Borlasi, 1841)
Common Name(s):
English - Tasmanian Devil
French - Diabre De Tasmanie

Taxonomic Notes: *Sarcophilus lamiaulus* has also been used recently in light of comparisons between a fossil specimen, *S. lamiaulus* (named prior to the naming of *S. harrisii*), and the extant species (Finlayson 1987).

Taxonomy Assessment Information
Geographic Range
Population
Habitat and Ecology
Trends
Conservation Actions

The IUCN Red List of Threatened Species

これがレッドリストのリストです。Webサイトに入ってくださいと、このような感じで出てきます。絶滅危機ということで、タスマニアデビルの例が類型化されています。これはレッドリストでいうところの、金鉱ゴールドマインだと私はいつも言っています。

いろんな関連情報が載っています。評価情報ということで、カテゴリーとか基準とか、評価者（アセッサー）とエバリュエーター両方の名前が載っていて、いつやったか、どういうふうにやったかというここでちゃんとピアレビューが

されましたということが確認されています。
必ず地図をつけなければいけないことになっています。生息地や生態系関係の情報も載っています。
どんな危惧があるかということも、主なものを拾って書いてあります。
ここに保全対策というものが載っています。先ほどご質問いただいた点ですが、もちろんこれはすべての対策を網羅しているわけではありません。でもここから始めることができれば、幸先のいいスタートではないかということです。

The IUCN Red List brand

IUCNレッドリストのブランドの話をしてします。
リストといっても実際は、いろんな情報が詰まっているものであって、リストというのはいくらも間違った呼称になってしまっています。しかしもう有名になってしまったので、名称を変えることはできません。
レッドリストはブランド的には、WWFパンダについて世界で第2番目に有名な保全機関の名前になるのではないのでしょうか。
一級のブランドをもつということは、保全にとってはいいことだと思います。
【47】



THE IUCN RED LIST
OF THREATENED SPECIES™

The IUCN Red List of Threatened Species

こういった新しいロゴをつくりました。非常に感情に訴えるもの、強力なものである、複雑だということなのです。複雑だというのは世の中自体が複雑ですし、かつレッドリストにかかわっている人たちも非常に複雑だということです。これはロゴですが、いろんな人にパーツにわけて何だと思えますかというふうに聞きます。左上は葉っぱでもあるし、水滴でもあるし、塩水かもしれないし淡水かもしれない。右上のものは哺乳類の足跡かもしれないし、昆虫の産みつ

けた卵かもしれない。

ロゴを新たにつくろうと思うと、どんなに大変かというのは皆さんもご存知だと思います。レッドリストのロゴですごいところは、「いやだ、こんなの大嫌い」という人は誰もいないということです。それだけでもいいロゴだと思っています。でもここで、皆さん「私は嫌いだ」とおっしゃらないでくださいね。世界中で、動物園とか水族館、植物園等々でこのブランドをプロモートしていきたいと思っています。

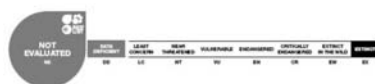
たとえば動物園の檻の中にある哺乳類が入っていたとしましょう。ノット・エバリュエイトというものは評価されていないということなのですが、現状としては動物園でも水族館でも植物園でも、そこにいるものはレッドリストでかなり評価されているものが多いということです。評価して類型する、分類するわけです。そうして分類したものには、IUCNの成果物としてちゃんと今説明したロゴがついています。

矢印がついていますが、軽度懸念から始まって一番悪くなると絶滅ということになります。

ふたつ矢印がついているということは、軽度としてはふたつ考えられるということです。絶滅の一途をたどってしまうか、または軽度懸念まで戻すことができますよという意味です。

動物園や植物園にとって、この野生絶滅は重要なことです。野生絶滅になると大変だということで、施設内部でも生息地以外のところで育種などを一生懸命やっているのです。絶滅に入ってしまうと、もうこれ以上矢印も動きようがない、先がないということになってしまいます。

【49】



The IUCN Red List of Threatened Species

これはボタンと呼んでいるのですが、いろんなバージョンがあります。独立して存在するものもあるし、長期にわたるロングスケールというボタンもありま

す。また短いほうのボタンショートスケールもあります。レッドリストのWebサイトでも、こういったスケールを使っています。地図もWebサイトに掲載されています。

レポートには、必ずロゴがついています。

こういったロゴも使って、目で見ればわかるようにしています。ロゴは委員会の人、事務局の人、パートナーの人、メンバーの方、また植物園とか水族館、動物園関係者等々含めて、真剣な目的をもっていただければどなたにもお使いいただけます。

【64】



And Where?

- Signage for enclosures
- Posters
- Brochures
- Books
- Photo captions
- Websites
- More!



The IUCN Red List of Threatened Species

ロゴは、いろいろなところに使っていただけます。檻につけてもいいし、ポスター、パンフレット、本、写真のキャプション、Webサイト等々に付与できます。このWAZAという世界の動物園、水族館団体もIUCNのメンバーになっていただいています。実はこの組織も今度の新しいビルに入ることになっています。

【65】



Working with Zoos and Aquariums

Article in February WAZA newsletter invited Zoos and Aquariums to use the IUCN Red List logo and scale



The IUCN Red List of Threatened Species

我々の事務局長がWAZA（ワザ）の事務局長さんと握手している写真です。

【66】



これはイギリスのペイトン動物園の写真です。WAZAの人たちに動物園、水族館でこのロゴを使ってくださいと奨励しているところです。そして実際使ってもらっています。

【67】



イギリスのブリストル動物園です。

動物園と水族館では、同じロゴでも使い方が違うなど思っているかもしれませんが。これは、各施設のマーケティング（販促）の人たちの好み、趣味がそれぞれあるということです。同一のブランドを使っているけれども、その活かし方はいろいろあります。これはすごくいいことだと思います。

私からお聞きしたいです。日本の動物園にも、このロゴを使っていただけでしょいか。ぜひIUCNの日本委員会の方に真剣に考えていただけるとうれしいです。

野生種がどういう状況におかれているのか、レッドリストを通じてわかっていただくことは重要だと思っています。このところ、何が野生の動物で、植物で

ということがわからないような状況になってしまっています。生物多様性の重要性は次世代にも受け継いでいかなければいけないことですので、ご利用いただければと思います。それさえできなければ、生物多様性の保全は絶望的になってしまいます。

ここまで何かご質問があればお願いします。

【質疑応答】

【Q】先ほど分布図のスライドがありました。以前SSCのスペシャリストグループの方が来てクマの分布図の線引きをしたのです。かなり荒い線の引き方をしていたのですが……。分布図の線引きをする基準とかルールといったものは何でしょうか。

【ジェーン】次のプレゼンの中でご説明しようと思っていました。線引きはすごく複雑です。

What does The IUCN Red List tell us?

それでは再開させていただきます。今日いらっしゃっている方の中で、WAZAの日本のメンバーがいらしゃるとうかがったので、関連書類を翻訳させていただいてお届けしたいと思います。

今年は国際生物多様性年にあたりますので、この年に日本の動物園も我々のロゴを使っていたらと発表していただくと素晴らしいと思います。よろしく願いいたします。

昨日のシンポジウムにいらした方いらっしゃるでしょうか。昨日お話したことで一部はレッドリスト関連のことでしたので、その辺をお話します。

【69】



- State of the World's Species
- The 2008 Review



The IUCN Red List of Threatened Species

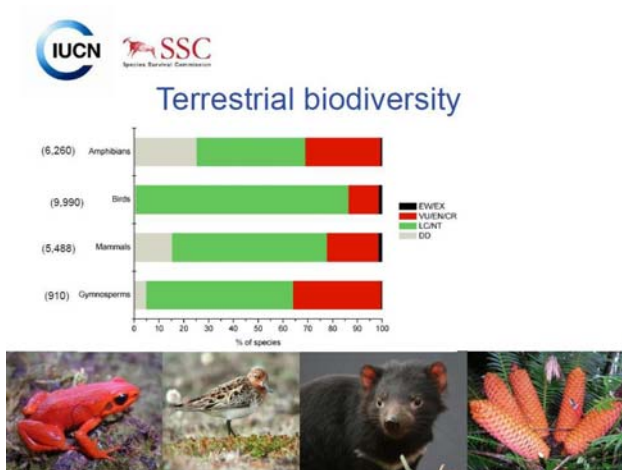
お話してきたように我々が評価している種については、かなりのことがわかっ

ています。すべて分析した結果、コード化されています。ここに書いている「ワールドライフ イン チェンジングワールド」というのは、バルセロナの大会に備えてつくられたものです。これがIUCNのレッドリスト関係のWebサイトで一番ダウンロードされているものです。

いろいろな章から成り立っているのですが、これをご覧いただくと、今日ご質問いただいたことへの多くの答えが入っています。

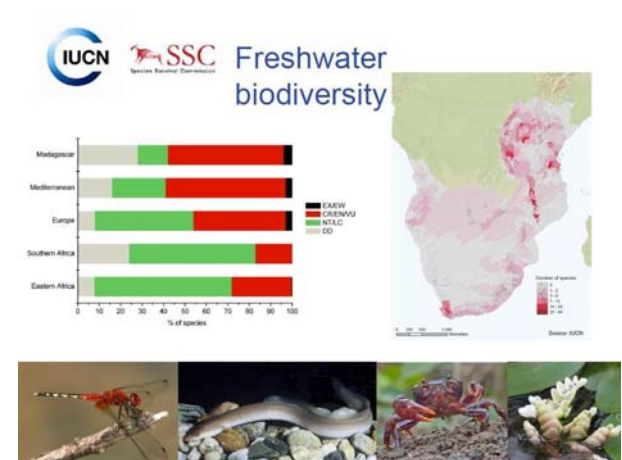
テーマ的には気候変動、サンプリングのアプローチ、地域ベースの作業としては地中海を対象にしたものもありますし、お話した海洋種の話も入っています。一応書籍という形で出したのですが、印刷版は部数はそれほど多くありません。

【71】



これは分析内容の例ですが、いろいろな種にわたって完全に評価を行っています。カテゴリー分けとしてはデータ不足だったもの、絶滅というふうに類型されたものまで、いろいろあります。

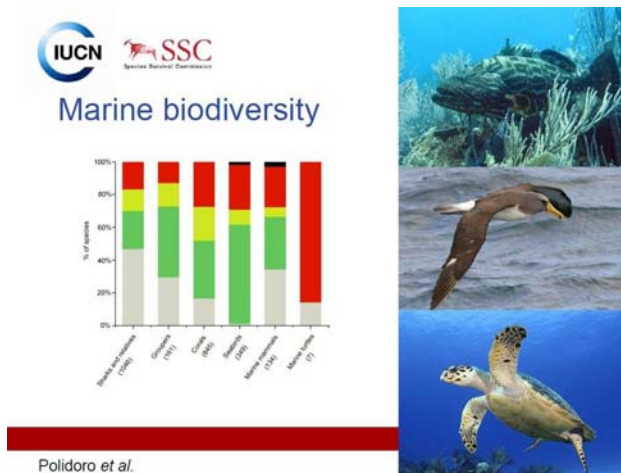
【72】



これは淡水系の生物多様性を示したものです。詳しくはご説明しませんが、詳

細はWebサイトのほうに載っています。

【73】



これが海洋系に対しての生物多様性です。もちろんすべてを評価はできませんが、一応プロジェクトは立ち上がっています。いくつか種を選んでやっています。もちろんそれなりに基準を使って選択をしました。サンゴ、一次生産系、マングローブ関係の種、海草なども入っていますが、すべてを対象にすることはできませんでした。

【74】



これは両生類と哺乳類を比較した結果です。色づけで出ていますように、種単位として絶滅危惧に至っているかいないかという類型はバラバラです。

【75】



The good news too...

- 37 of the genuine improvements in status are mammals
- 5% of threatened mammals have increasing populations
- 16 bird species prevented from going extinct in the last 15 years due to conservation efforts



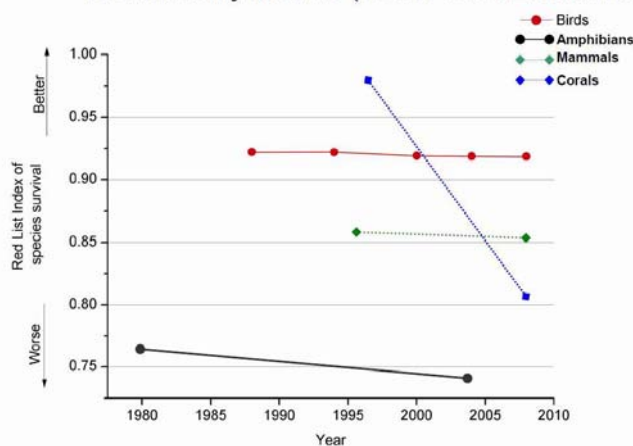
皆さんレッドリストを出すたびに気が滅入るとおっしゃるのですが、その中にはいいニュースも入っていますのでちゃんとお伝えするようにしています。

2008年末にレッドリストを出したときには、いくつかいいニュースも入っていました。ここに書いてある通りです。

昨日も申し上げましたように、対象をちゃんとしぼって保全努力をすればそれなりに成果は上がります。うまくいった例は幅広く人々に伝える必要があると思います。

【76】

Biodiversity trends (IUCN Red List Index)



これはIUCNのレッドリスト・インデックス指数といわれているものです。少し技術的になりますが、私はこれはレッドリストの中でも最も重要な点のひとつだと思っています。昨日お話しましたので、多少重複する面があるかもしれませんが、ご了承ください。

2002年当時に、世界的に政府が合意をして2010年までの目標を設定しました。2010年までに生物多様性の損失率を減らしましょうということになったのですが、何を論拠にしてその目標が達成できたと評価できるのでしょうか。という

のは、そのための裏づけするデータがあまりないからです。
みんな軽度懸念に入ってしまうのが一番いいわけで、これを目指しているわけ
です。縦軸にとった1が理想的ということです。
その対極にあるのが一番下の0、絶滅ということです。
本当は複雑な数学的な作業がかかるので、今日は説明できないのですが、指数、
インデックスを計算することができるわけです。
対象になっている種の群は少なくとも2回、複数回評価しています。

最初にやったのは鳥類です。鳥類が一番評価対象になっているということで、
グループとしては5回ちゃんと見られているわけです。結果はそれほど悪くない
んじゃないかと思われるかもしれませんが、理想的は軽度懸念の線から考えた
ら、それでも悪いということです。

両生類は絶滅する危惧が1/3です。つい最近では、このクラスとして25%も減っ
ているというのがわかります。生息地が破壊されていることと、菌類の一部も
こんなに減っているということがわかります。

今のところ哺乳類は鳥類と両生類の中間に位置しています。それでもどんどん
絶滅危惧の度合いが高まっています。特にアジアにおける絶滅危惧度が高いの
です。アジアにおいてはこういう種がいろんな目的で利用されているという現
実がありますので。

サンゴ類は1990年代の中頃は危惧はなかったのですが、現在は惨憺たる状態
です。つまりサンゴについてこれだけ注目が集まったのは、やはりIUCNの作業の
おかげだと思っています。どんどんディッピングポイントに近づいているとい
うことで、CO₂濃度387ppmということでこんな形です。

ただ種間における多様性が非常に大きいということで、もっとたくさんのグル
ープを見る必要があると思います。

関心のある方はぜひレッドリスト・インデックス詳しいことをWebサイトでご覧
になってください。そして生物多様性条約局（CBD）によっても正式な指標と
して、2004年以来このインデックスは採択されています。ちょうど政府が目標
を設定した2年後でした。非常に役立っているし、結果は非常に断言性があると
認められております。ミレニアム開発目標（MDG）についても採用されている
資料となっています。

この辺でまたご質問どうでしょうか。

【質疑応答】

【Q】IUCNのレッドリストに載っているものは、必ずしも日本の環境省のつくっているレッドリ
ストに反映されていません。世界レベルの希少性と地域レベルや国レベルの希少性、またその種

を採用するか、どういうふうに活かすかというあたりについて、そういう政策に活かされるようにIUCNとしてやっていることはあるのでしょうか。

【ジェーン】おっしゃるように世界には国別のもの、地域別のもの、いろいろなレッドリストが出回っています。一部はIUCNの方式を採用していただいています。IUCNのシステムを使っていたらいいものについては、国家間の比較ができるわけです。

しかしIUCNのシステムを使っていなくても、非常に有用なレッドリストは世の中にいくつもあります。アルゼンチンの例をあげましょう。アルゼンチンにおいては、4つの哺乳類に関するレッドリストが出ています。それぞれとてもいい情報が載っているのです、我々も参考にさせていただいています。我々はありとあらゆる情報を見たいと思っていますので。

ご参考までに、地域レベルのレッドリスト・ドットコムというWebサイトがあります。これはIUCNのシステムを使っていないレッドリストばかりを集めたものです。ぜひごらんになってください。最後にひと言。このミレニアム開発目標（MDG）関連で申し上げますと、IUCNのシステムを使っていけないと、インディケーターとして認められないということになります。この点は重要ですので、ご注意ください。

【Q】クリティカル・エンデンジャードという基準の中に、以前ポッシブル・エクステINCTを組み込もうかという話を聞いたことがあるのですが、ポッシブル・エクステINCTというカテゴリーは今どのようなになっているのでしょうか。

【ジェーン】今も討議中なのです。というのも、多くの種について本当に実存するものがどうかまだ判断がわかれているものがあるということです。証拠がないから、それ自体ないという証明にはならないので、今でも討議中なのです。

【Q】昨日のシンポジウムで、IUCNの2020年の目標として生物多様性の損失がゼロということを発表されましたが、そのときに使う指標としてこのレッドリストを使うと考えていいのでしょうか。

【ジェーン】そのとおりです。興味深い点ですが、これはまだ話の決着がついていないのです。私どもの見るところ日本政府のとっているお立場はIUCNの立場とは30年くらいずれがあると思っています。つまりは科学と政治の接点の話だと思いますが、現状維持でやってしまったら、こんな目標は2020年になっても2050年になっても達成はできないということです。

もちろんIUCNの掲げている目標は非常に野心的だというのはわかっておりますが、だからこそリソースを十分投入して、それでもかなり高い目標を設定しないとできないので設定しているわけです。この目標をもう少し軽微なものにしたところで、達成は難しいというのが現状です。でも放置しておいたらどうなるか、考えるだけで恐ろしいことです。ぜひ今の段階でビジョンを示していただいて、リーダーシップを発揮していただき、確固たる政治的な意志を見せていただきたいと思っています。

【Q】レッドリストで一般の人が誤解するのは、レッドリストに記載されるともう法律的に保護される種になったんだと思われる方が多いということです。しかし法律上の保護とレッドリストは全く別物です。法律上どの種を保護するのかということは、アメリカの種の保存法などでもよくもめることです。日本ではもっとひどい状況で絶滅危惧と思われている種のうち、種の保存法で保護されているのはそのうちのほんの一部でしかありません。このへんをうまくやっている国はあるのでしょうか。

【ジェーン】とても興味深い点です。このレッドリスト自体が非常にパワフル（強力）であるからこそ、時によっては誤解されて、レッドリストに掲載されたら自動的に国別に保護種になったりするのだらうと思います。でもレッドリストのやっている作業は、本当に科学的な根拠によって裏づけされているものであるということなのです。たくさんの人たちが現場でやったことをベースに構築されているからです。だからこそ、ご覧いただいたように組織図も複雑になっているのです。いろんな人がからんでいるということで、システムとして頑健なものになっています。しかしIUCNとして、各国政府に対してこうしてくださいといったようなことは決して言いません。もちろんメンバーレベルでは言っているかもしれませんが。世界の政府、NGOの数からいくと、IUCNの心情としては政策にとって重要な情報でありたい、しかし政策に対していちいち処方的なことを言うのはできるだけ避けていきたいというふうに思っているのです。でも、これはホットなトピックなので議論がずっと続いているのです。アショーク会長などは、もう少し政策処方的にもなっていんじゃないかと言っていますが、うまいところでバランスをとらないとせっかく得た政府、NGO、また科学者間の信頼を失いかねないので、非常に微妙な問題だと思います。

今でも非常に議論を呼んでいるトピックということで審議が続いています。

日米以外にモデルとなる国はありますかということですが、私が知る限りありません。

各国政府は自由にやりたいことをやる、それこそが民主主義ということですから、やはり有権者の方が我々の情報を得ていただき、有権者が理論武装をして能力強化をして政府に物申すという順序になるのではないのでしょうか。

ワイルドライフサービスというアメリカにある政府機関は、そのメンバーの中にSSCのメンバーもたくさんいまして、アメリカ国内で非常に勢力が強いので、絶滅危惧種というふうに認められると保護される可能性が高いのです。ホッキョクグマについても、全くそのとおりだったのです。危ないと思えばすぐに保護するといったような非常に勢力の強い政府機関がアメリカにはあります。

【Q】IUCNのレッドリストはスペシャリストがかかわっていて、トレーニングしているということですが、一般的な市民の段階までのPRはどのようにお考えでしょうか。というのも、私が受け持ったクラスの2年3年の学生たち（留学生たち）に「IUCNを知っていますか」と聞いたら、誰も知らなかったのです。「WWFなら知っている」というのです。

【ジェーン】いいご質問をいただいたと思います。答えはイエスなのです。ブランディングでいろいろやろうとは思っているのです。つまりもう少し一般の方々にまで周知徹底をやろうという

ことで、いろいろ努力はしています。みなさんIUCNはご存知なくてもレッドリストは知っていると答える方が多いのではないかと思います。レッドリストでも、IUCNのものとはそうでないものがありますが、我々としてもできるだけ知名度をあげようとしています。

【Q】IUCNの基準を勉強したいので細かい質問になります。1番目の質問は、無脊椎動物（インバーティブレイト）について、昆虫も含めてとても大きな分類物にあると思います。それに対してどういったインバーティブレイトを想定していらっしゃるのでしょうか。2番目の質問は、どのようなストラテジー（戦略）でインバーティブレイトに対しての情報を集めているのでしょうか。3番目は、インバーティブレイトの微生物の境界はどこにおくのでしょうか。

【ジェーン】第3番目のご質問が一番難しいですね。常識的に考えるということになりましょうか。微生物はどこまでかということは、今申し上げても非常に大変なので申し上げられません。2番目の戦略ということについては、淡水の種と海洋の種があるということで、かなり海洋の種については多数の無脊椎動物がすでに入っているわけです。詳しいことは、Webサイトで先ほど申し上げた「ワールドライフ イン チェインジングワールド」をご覧くださいと思います。特に海洋に焦点をおいたものがありますので、そちらをご覧ください。淡水種については、多数の甲殻類とかトンボ類が入っています。今グローバルな評価を進めていますので、まずは地域レベルでそれぞれ淡水、海洋について調べる、その後結果を持ち寄って合算することになります。

レッドリストオーソリティもこれにかかわっています。SSCの委員長がすでにふたりを任命しています。ひとは海洋系の無脊椎動物の専門家、もうひとは地上系の無脊椎動物の専門家です。略してマーラとターラと呼んでいます。このマーラとターラというのは特別なふたりということで、この人たちは世界中のすべての無脊椎動物についてのエキスパートがどこにいるかが頭に入っている、この人たちが交通整理機関のような形になってワークをしてくれるわけです。

たとえば知名度のないような種について誰がエキスパートかとなったときに、今SSCにはそのエキスパートはいないので外から捜してこなくてははいけません。そこで、捜せるのはこのふたりがいるからということです。今のところ、非常にうまくいってますし、フレキシブルにやっています。

なにしろ無脊椎動物=大きなチャレンジであるということです。それに負けにくいくらい大きなチャレンジが、植物です。植物も対象が非常に広いので、どのグループを扱うのかということでまだ議論がされていません。

【Q】野生というものの考え方について質問します。先ほど動物園とか植物園との協力というお話がありましたが、たとえば動物園や植物園で人工的に繁殖されたものが野生に戻った場合、IUCNでは再導入のガイドラインもつくっていたと思いますが、再導入されて何十年も経ったら野

生に戻ったというふうに考えるのでしょうか。それとも、レッドリストの中ではもともと野生で繁殖して育っている種というのが純粋な野生の種として考え続けるのか、知りたいと思いました。

【ジェーン】興味深いご質問です。つまり何をもって野生とするかということ自体とても興味深いことです。一部ですが、動物園、水族館の方々の協力を得ています。

こういった人たちは自分の施設内で保全する目的の元で、自分ながらの育種プログラムをもっています。ただ、なぜ育種するか、本当に保全の目的のためなのかということになると、必ずしもそうではない場合もあるのです。

実践的な観点からのお話をすると、種によっては再導入されて野生に戻す場合があります。かりに適切に野生に戻すことがされて、モニタリングもされているとしても、その種は未来永劫再導入されたものという表示（レットル）は変わらないということだと思います。

ただIUCNの公式データベースとして、十分追跡しているかとなると、たぶんそういったものはないと思うので、動物園の方のご協力を得るしかないと思っています。成功した例もあるのかも知れませんが、UAEでのオリックスの例がありますが、これは家畜に害を与えたということがあったということで、あまりうまくいっていない例もあるということです。が、いずれにしても我々としては公式な見解はまだ出していないと思います。

【Q】千葉県で地域博物館の学芸員をしまして、地域のレッドデータブックに携わっています。今地域では同定能力のある調査者が高齢化で減少していて、大きな問題になっています。解決策はあるでしょうか。

【ジェーン】これは全世界共通の問題だと思います。スウェーデンがあるプロジェクトをやっています。スウェーデンだからこそできるプロジェクトとも言えます。スウェーデンの分類研究所がスウェーデンにあるありとあらゆる種を対象として、今プロジェクトを組んでいます。その対象物の中には無脊椎動物からコケ類、地衣類に至るまでありとあらゆるものが入っています。そしてこれが本の形にして、次々と出版されているのです。種ごとに分布図などの地図をつけて、記述説明もつけています。分類学者の中でも年長者を最優先して、その本に記載するようにしているのです。というのは、どうしてもいずれ亡くなってしまふ方だからという理由です。目に見える形で高齢化が大きな問題となっているという証拠でもあると思います。

実は生物多様性条約の機構の中で、グローバルな分類イニシアティブというものが進んでいます。このイニシアティブがどれくらい効果的かはわかりませんが、この点について政府にアピールするという点では、注目が集まっているということで今年（2010年）が最適です。生物多様性条約のもとで若い人たちを分類学になじませて、それなりの投資をして訓練、育成していくという点をぜひアピールしていただけたらと思うのです。こういう状況になってしまったこと自体、私自身もとても悲劇的だと思っています。

Publication of The IUCN Red List

それではIUCNのPR関係のお話を少しいたします。毎回何か発表するたびに、全世界的にマスコミの方から取材されるということでも、かなりの程度になっています。

【78】



右側の写真は、コンサベーション・インターナショナルの会長が、この方は我々の組織の副会長でもあられる人ですが、ワシントンで発表したときの動物園での写真です。マスコミの取材も多く、世間の注目を惹いているめざましいものがあります。

【79】



実はIUCNの本部にいる事務局の人たちもどのくらいレッドリストを知っているかということになると、ちょっと疑わしいのです。もしかしたら、内容については今日の皆様方のほうが詳しく知っておられるくらいです。ということで、部内の人たちももっと啓発しましょうということで、少なくともレッドリスト

の出版発表日には、何か赤いものを身につけなさいといったようなことを言っています。

ただ苛立ちも感じているわけです。マスコミの注目は抜群なのですが、本当にそれが保全の対策につながっているのかということ。一部にはつながりもできていて、実際の保全のアクションにつながっています。これはマスコミというよりは、レッドリストをご覧になってそれをリソースとして使っていただいで。問題は何かということがわからないと対策はとれません。

まず問題の所在についてわかってもらうということが第1歩で、それでアクションをとってもらう、そして何が絶滅危惧なのかということを知ってもらうと保全措置がとれます。しかも、保全措置の内容についてはちゃんとレッドリストの中にどういう措置が取り得るかということが全部掲載されていますので。

できるだけレッドリストのことをわかってもらうということで、啓発活動をやっています。写真を載せるということが非常に効果的だと思っています。ロゴを考えていたときに、いろんな人の意見を聞き取り調査しました。私の娘と娘の友達の意見も聞いたのです。オフィスに来てもらってWebサイトを見せて、どお？と聞きました。すると「全然おもしろくない。たいくつだ」と言われてしまいました。

娘の言ったとおりだと思いましたので、アーカイブの人の協力を得て写真を見つけました。そしてそれをレッドリストに載せることにしました。今度発刊されるヨーロッパのレッドリストに入っているアップデートに関しては写真が掲載される予定になっています。

もちろんこのシステムは科学者がやった作業の賜物なのです。私自身も科学者ですが、他の科学者は一般の人とコミュニケーションするのが苦手なので、そのへんを気をつけなくてはいけないということと、人間というのは視覚に非常に頼る霊長類で、写真がないと今の世の中コミュニケーションができないというくらいになっています。ということで、次のことを考えました。

今年（2010年）は国際生物多様性年です。「本日の種」ということで、毎日毎日いろいろな種をその年のロゴもつけて紹介することにしています。最初にUNEPがこういうアイデアはどうですかともってきてくれたのですが、私たちもずっと前から同じようなことを考えていたのです。本日の種ということで、毎日紹介しています。写真にはスケールをつけて、どのくらいの状況の危惧のレベルにあるのかということと、短い説明書きもつけて、決して科学者ではない一般の方にもわかるような形で掲載したところ、好評を博しています。

最初はPDFだけで始めたのですが、その後ウェブページもつくりました。一見したところシンプルに見えるのですが、この背後にはスタッフのたゆまない努力があるわけです。SSCのチェアマン自体も協力してくれています。もちろん本日の種も見られますが、昔に戻ってバックバージョンのものも見られますし、情報がたくさんつまっています。

いろんな団体の方がこれを使いたいということで、それぞれのWebサイトにこれを掲載してくださっています。ご興味ある方はご連絡いただければ、ご相談に応じます。またツイッターを通じてつぶやきにもなっています。iphoneのアップにも使われるということで、いろいろな話が進行中です。

【80】



これはUNEPの事務局長のシュタイナーさんの名前をとってつけられた学術名はここに書いてあるとおりで、カエルです。IUCNにおける私の以前の上司でもあるということで、掲載されたその日に載りましたよと連絡しました。こういうのがあると、会話もはずみます。

こういうことをやると一般の人がどういう反応を示すのかということがよくわかるので、非常に参考になります。ITコミュニケーションのインフラを駆使することによっていろんな形で知識とかを収集できると。

もちろんレッドリスト関係で広報官とかいるのですが、その人を通してだけではとても間に合わないので、創意工夫をして一般の人たちに伝えることがとても重要なのです。

【81】



これが本日載っている種です。本当は無脊椎動物とかコケ類とか地衣類の写真をお見せしたほうがよかったかもしれませんが。一応カバーはしていますが、今日の写真には載っていません。
以上です。

---どうもありがとうございました。これでお手元にあるスライドのモノクロのほうのコピーを10ページまで終わりました。あと、どうしましょうか。

今のところファーストバッチだけ終わったのですが、残り時間どうしましょうか。あと15分しか持ち時間がないので、10分間は質疑応答、残った時間で技術的な話ですとかさせていただければと思います。

その前にご紹介したいのですが、IUCNの日本のプロジェクトオフィスでいらっしゃる古田さんです。皆様方から今後レッドリスト関連のことを何でもフォローさせていただきますのでご紹介申し上げます。

また日本の委員会でご活躍の吉田先生とスタッフの方もご紹介申し上げます。保全ですとかレッドリスト何でもステークホルダーの動員ですとか、本当にお世話になっております。日本で非常にいい活動が進んでいるのですが、もし日本レベルでお答えできないような問い合わせがございましたら私、または私のスタッフ本部のほうにお問い合わせください。よろしく願いいたします。

レッドリストの用紙は日本のIUCN委員会で翻訳したものがありますので、教育用にとか、催し氏でお使いになりたい場合は言っていただければと思います。

それではご質問を受け付けますので、どうぞ何なりとお聞きになってください。

【質疑応答】

【Q】日本でもレッドリストが発表されたときはメディアからの取材も多く、日本委員会としてWWFジャパンとかコンサベーション・インターナショナル・ジャパンと共同で対応するのですが、レッドリストの発表の通知がいつも2日前くらいに「発表しますよ」となるのです。レッドリストの発表する時期というのは、決まっているのでしょうか。

【ジェーン】いいご質問をいただきました。レッドリストの発表は、正直申し上げて非常に難しいのです。私たちのスタッフは最後の最後まで一生懸命働いています。かつリソース不足なので、いつも大変なのです。そこで私は新しいルール「ロックダウンデート」を設定しました。つまりレッドリストにデータを入れるのであったら、6週間はデータとして入れたという実績がないと外には発表したくないと思っています。しかし、最後に駆け込みで「この種を入れてください」ということが、必ずあるのです。新たな新規要請ということで、これだけでも50通くらいのメールが来てしまうのです。そうすると押せ押せになって、結局余裕をもって発表日をお知らせできなくなります。これ自体大きな問題になっているということは、十分意識しておりますので、何とか改善したいと思っています。

【Q】先ほどから見ている地図はヨーロッパの大西洋中心の世界地図を見ていたような気がします。東アジア、南アジアといったアジアの他の地域、また太平洋地域の最近の動きなどありましたら、お聞かせください。

【ジェーン】一般的な状況ですが、アジアの哺乳類の状況をお話したいと思います。特に絶滅が危惧される哺乳類の種を他の地域と比べてみます。

アジア特有の問題の第1点は、消費の問題だと思います。つまり哺乳類種が食用に倒されてしまう、もしくは医療用の効果があるということで消費されてしまうことがあります。四足のもの、這っているもの、動くものはすべて食べてしまうということがよく言われます。それが合法であれ、違法であれ、問題になっていると思います。貧しい人たちはそれが食糧源になっていますから、倫理的問題もからんできます。種の保全を優先するのか、人間を優先するのかということで議論が出てくるころでしょう。

特にトラが最たる例だと思います。トラもある部分が医療用に効き目があるという説があります。ビルマのトラが特にいいという話もあるので、本当に医療用の効き目があるのか、私も専門家に問い合わせたりしていますが、どこまで本当なのか疑いの念は残るわけです。

トラについては、IUCNとしても思い入れが強い種なので申し上げたいのです。今年は生物多様年でもあり寅年でもあります。今は世界中のあるとあらゆる団体が、トラは絶対に保護しなければならないということで、実際に野生にいるトラの数より保護団体の数のほうが多くなっています。アメリカが拘束しているトラの頭数は野生にいるトラの頭数よりも多いのです。トラの実物を見たことがない人のほうが多いかもしれませんが、皆熱心にトラは保護しなければならないと言っ

ているわけです。生態系全体から考えても、トラを失ってしまうと生活自体がある部分欠落してしまうということになるのです。実はこの話は政治が大いにからんでいるものです。政治の状況があまりにもひどいということなのです。IUCNとしては、今はどっちかという静観する態度をとっています。というのは、他の団体がいろいろ出てきてしまって、自分たちこそ解決策ありと自称していますが、これも本当にそうなのか疑わしい面もあるわけです。やはり政府が立ち上がってコントロールしなければいけないということもあるのです。

IUCNというのは本来、基準をつくる場所、知識を蓄える場所です。保全法のひとつとして役立っているのは、ゾウを守るという運動です。ここでは対話のプロセスをとっても大切にしています。

スペシャリスト、科学者を集めることも大事ですが、政府が入ってこないとも何も進みません。政府の参加が欠かせないのです。ですから政府が入るような枠組みを我々がアレンジしたいということはずっと言い続けています。でも、なかなかうまくいかず、今のところ具体的な成功例にはなっていません。

本当に皆さん、今日はいらしてくださってありがとうございました。スライドを手伝ってくださった方にもお礼を申し上げます。

---会場のほうの時間制限がきてしまいましたので、大変残念ながらここまでで終わりにしたいと思います。ジェーン・スマートさん大変有意義なお話をどうもありがとうございました。IUCNでいろいろと肩書きをお持ちですが、IUCNの広報官というポストもぜひ手に入れて世界中まわっていただきたいと思います。最後にひと言だけ。今日は主催は生物多様性 JAPAN と、IUCN ジャパン、IUCN 日本委員会の共同主催でした。それから平成 21 年度の独立行政法人環境再生保全機構の地球環境基金の助成を受けております。さらに平成 21 年度公益信託日本経団連基金の助成もを受けております。